

〈研究ノート〉

乳幼児の言葉の発達と保育者・養育者における 「言葉」を育む援助

山 梨 み ほ *

要約

インターネットの利用、スマートフォンや様々な情報端末機器の普及など世界中の情報効率的に手に入れることができる時代となっている。様々なアプリを使い、動画授業が閲覧できるサービスの配信や、大手通信教育企業において学習タブレットの利用もあり、いつでもどこでも動画を視聴できる便利さから、教育現場においても活用が進んでいる。

しかし、子育てにおいて、日ごろから便利な情報ツールのみを使い続けていると、子どもたちは情報に対して受動的な立場に置かれ、乳幼児への言葉かけの少なさによる言葉の発達への弊害や人とのコミュニケーション不足が課題となっている。そのような中、子どもとの直接的なコミュニケーションを後回しにして、動画を乳幼児に長時間見せている親も少なくない。

このような状況の中、保育者として、乳幼児期からの言葉やコミュニケーション能力の発達と、言葉を育む方法を、先行研究から探るとともに確認し、現代の様々な問題の中、乳幼児が言葉を獲得するため養育者や保育者の援助や対応方法について検討を行った。

キーワード 言葉の発達、乳幼児、親子、保育、子育て支援

目次

1. はじめに
2. 方法
3. 結果
 3. 1 言葉の発達と愛着
 - (1) 愛着とミラーニューロン
 - (2) 言葉の発達と随伴性
 - (3) 言葉の発達と身振り指差し
 - (4) 言葉の発達と家族関係
 - (5) 言葉の発達と探索活動期
 3. 2 3項関係と共同注意
 3. 3 語彙の獲得
 - (1) 語彙爆発と即時マッピング
 - (2) 2語文から3語文へ
 3. 4 情報端末機器などによる影響
 - (1) 情報端末通信機器についての保護者の意識調査
 - (2) 医学的・科学的観点における情報通信端末機器媒体の子どもへの影響
 - (3) 情報通信端末機器媒体と絵本について
 - (4) テレビ視聴と幼児の生活リズムへの影響
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

スマートフォンやタブレット、ノートPC等情報端末機器の普及により、誰もがインターネットで、情報を効率的に入手し、コミュニケーション手段として利用する⁽¹⁾ようになっている。動画授業が閲覧できるサービスの配信や、大手通信教育企業において学習タブレットの利用もあり、いつでもどこでも動画を視聴できる便利さから、教育現場においても様々な情報端末機器の活用⁽²⁾が進んでいる。

半面スマートフォン等の長時間視聴による生活習慣の乱れや、不適切な利用による子どもの犯罪被害、さらに、プライバシー上の問題につながるケースが増えてきた⁽³⁾。乳幼児においても、家でテレビを視聴するだけでなく、手軽に外出先の公園やレストラン等で様々な情報通信端末を使用し、動画視聴ができる時代となっている。

2014年に実施した「子どものICT活用能力に係る保護者の意識に関する調査」によると、小学校入学前に情報通信端末を利用する割合が、2011年間以降の3年間で大きく上昇していることが明らかになった⁽⁴⁾。医学的・科学的観点においては、過度なテレビ視聴に関して危惧を示す団体も存在している。1999年にアメリカ小児科学会で、2歳児未満の子どもについてはテレビ視聴をさけるように促すべきである⁽⁵⁾と発信された。また、日本の小児科学会が2歳児でのテレビ・ビデオ視聴は控えること、さらに、1日のメディア接触時間は2時間を目安が望ましいという提言⁽⁶⁾を出した。

このような状況の中、乳幼児が日ごろから便利な情報ツールのみを使い続けていると、人と人が気持ちを通いあうというコミュニケーションの重要な部分を養育者は忘れる危険性がある。さらにコミュニケーションを経験しないことの危惧が報告されている。乳幼児は情報に対して受動的な立場に置かれ、乳幼児への言葉かけの少なさによる言葉の発達への弊害や人とのコミュニケーション不足も懸念⁽⁷⁾されている。

これらの状況を踏まえ、本稿では、乳幼児の言葉の発達について資料を通して確認し、乳幼児の言葉の獲得とコミュニケーション能力を身につけるために保育者・教育者・養育者の援助や対応方法について検討することとした。

2. 方法

文献研究は、主にCiNii（国立情報学研究所の運営する文献のデータベース）の子どもの言葉に関する学術論文、また、それらの引用文献から、「乳幼児の言葉の発達」、「乳児期の言葉」いずれかに関連のある図書を取り上げ、内容を検討することとした。また単行本の1つの章として扱われている場合は、論文として数えている。

3. 結果

3.1 言葉の発達と愛着

(1) 愛着とミラーニューロン

乳幼児は愛着や共感をもつ相手やモノが強化因子になりやすい。10か月ごろの乳児は、愛着ある人の顔の表情や言葉の調子、リズム等の非言語的な情報を読みとって、その意味を推測する⁽⁸⁾。

脳内のミラーニューロン細胞は、自他弁別、他者の行為認識、共同注意、模倣、共感などと関連すると考えられている。ミラーニューロン細胞は、他人の行動や心の動きを観察して模倣、共感する脳の部位であり、発話へとつながるコミュニケーションの要所となっている。

乳幼児は相手の感情や様々な事柄を再度読み取りの確認をしていき、共感する気持ちが芽生える⁽⁹⁾。

(2) 言葉の発達と随伴性

乳児は自分が先に微笑めば他の人を微笑ますことができ、その人との心の交流ができるということに次第に気づくことが報告されている⁽¹⁰⁾。大人が乳児に話しかける際には、声の調子が高くなり、声の抑揚を誇張することが顕著になる。このことはヒトという種に遺伝的に備わった養育行動である。

乳児は強い随伴性の喚起力のある語りかけに対して、より効果的に随伴性が知覚する。乳児の好きな対象の模倣は無意識に強化される⁽¹¹⁾。

(3) 言葉の発達と身振りと指差し

乳児は言葉でのコミュニケーションが可能になる前に、表情、視線、目の動き、音声や手差し等で自分の気持ちを表す。手差しは指差しに先行して現れる。

指差しは発話の前のサインであり、重要な前言語、様々な内容を含む身体言語である。生後11か月頃から指差しの頻度が激増する時期になる。増えた指差しは生後15か月くらいで4倍ほどに増えた後、安定期に入り、21か月ごろに減少し始める。指差しは子どもが1語文を使っている時期にだけ高頻度で現れる。

3か月から18か月頃、身振りと手振りの組み合わせが現れる。子ども特有の体的思考があり、言葉と身振りを併用し、他者とコミュニケーションがとれるようになる。さらに、13か月から18か月ごろ、単語同士を組み合わせることを覚える⁽¹²⁾。

(4) 言葉の発達と家族関係

乳幼児期の言語は発達過程の濃密な親子関係や良好な夫婦関係などの影響が大きく、幼い時期から言葉を促す環境が、言語能力の差異を生む。「配偶者が育児に協力する、保護者の相談相手がいる、自信をもって子育てをしている等、適切な養育態度は幼児の対人コミュニケーションが良好である」ことが報告されている⁽¹³⁾。

(5) 言葉の発達と探索活動期

1歳の中ごろは、あらゆるものに触って操作してみようとする「探索期」とも重なり、乳

幼児は指差しの間いも多くなる。並行して、急速に語彙数を増やしていく時期である。探索活動により、乳幼児は自分のした活動や欲しい物を探すことを学び、苦痛や恐ろしい事態を避けることを学ぶ。指差しによる探索の頻度の高い子どもは言語が理解でき、話す単語数が高い傾向にあるとされている⁽¹⁴⁾。

ウエルナーとカプランは言葉や身振りでの象徴活動を考えるために、話し手、聴き手、指示対象、象徴体の4つの構成要素を考えている。発達過程において、話し手は成熟していき、聴き手は養育者から友達仲間に、さらに一般化された他者にまで移り変わる。しかし、最初は分化しておらず、子ども、他者、対象は原始的共有応対にある。

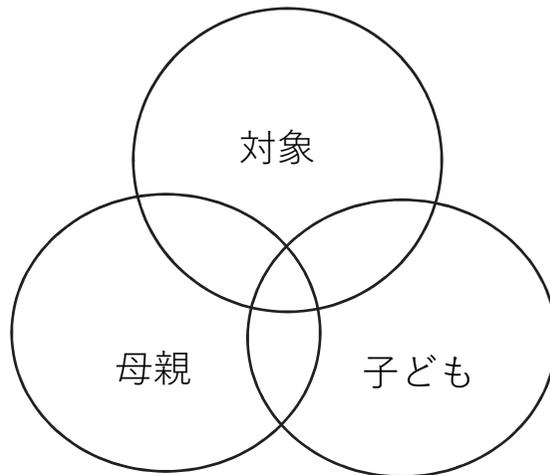


図1 原始的共有状況

出典：小林春美、佐々木正人『子どもたちの言語獲得』大修館書店 p.189

自分がみているものを大人にみてもらいたくなり、指差しをして3項関係が成立してくる⁽¹⁵⁾。

3.2 3項関係と共同注意

3項関係の最初の段階は生まれてから5か月位までとされている。子どもの発声に養育者が顔を向かいあわせて微笑みあい、養育者が答えて情緒的シグナルを根幹する段階「2項／情緒的関係の段階」と言われている。

第2段階は6か月から18か月くらいまでで、子ども、大人達、他の物にも関与し、3項関係の段階と言われている。この段階に子どものコミュニケーションの意図が明確になってくる。

このようなコミュニケーションでの3項関係の成立が言語の発達の基礎となる。言葉でコミュニケーションができるようになるには、言語以前の非言語的コミュニケーションを交えた3項関係が非常に重要である。

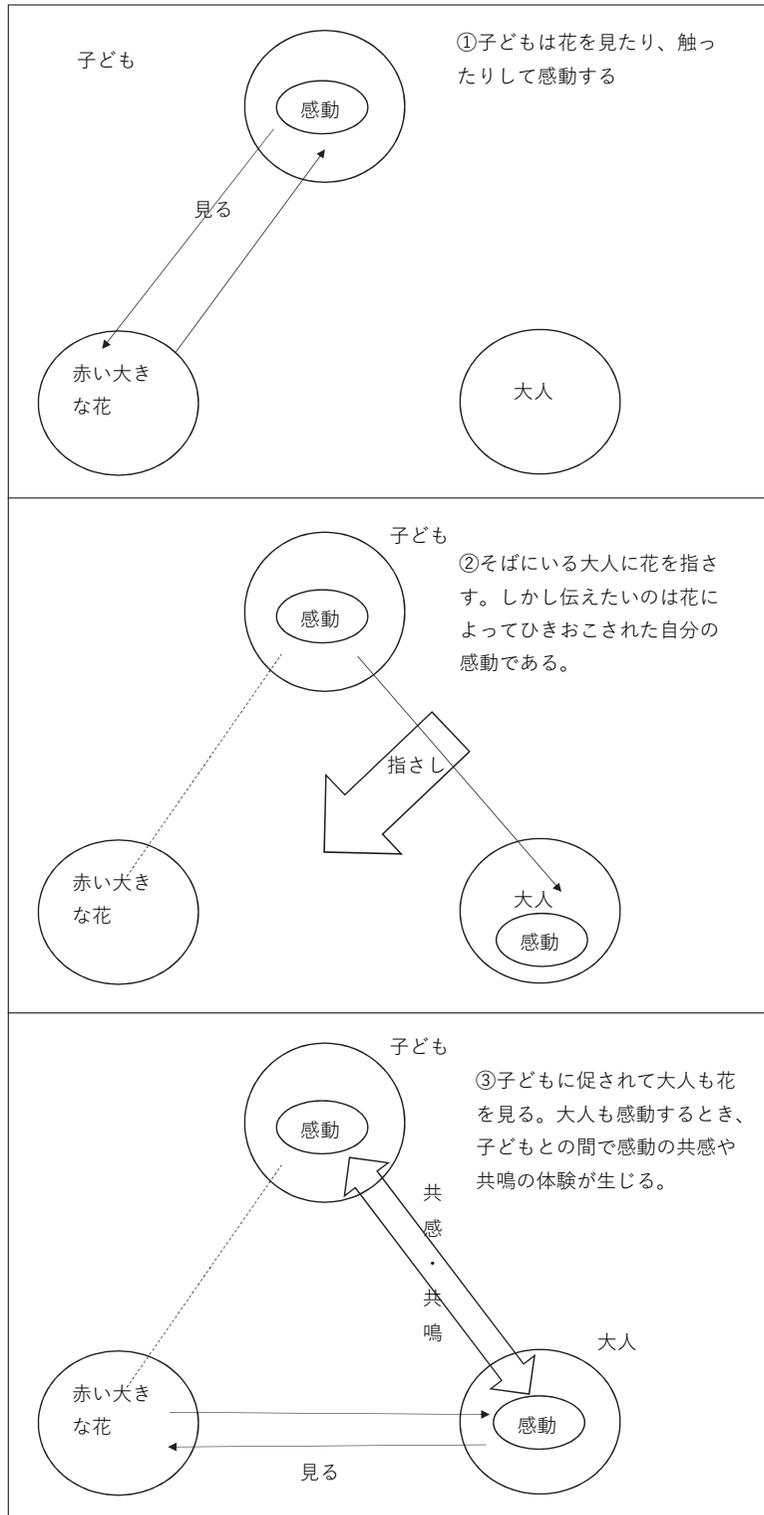


図2 指さし

2歳までには物のやりとりからイメージや言葉によるやりとりへと、その場限りの同時模倣から記憶やイメージを介した延滞模倣へと、時間と空間を超えた理解や伝達が可能になる⁽¹⁶⁾。

表1 日本の子どもの早期表出語

順位	JSDLs獲得データ小林・綿巻2003		Web日誌小林・永田 (2008)		一女性の縦断データ小山 (2009)	
	語彙項目	50%通過月齢	語彙項目	平均獲得月齢	語彙項目	出現月齢(月・日)
1	マンマ (食べ物)	15	まんま	14.4	マンマ	12:06
2	(イナイイナイ) バー	15	はい	15.6	ハーイ	13:11
3	ワンワン (犬)	15	ばー(いないいないばー)	15.6	ニャー	13:17
4	あーあっ	15	ママ	15.8	あった	14:06
5	バイバイ	16	パパ	15.9	ママ	14:07
6	はい	17	わんわん	16.4	テッテッテ (手)	14:16
7	ブーブ (車)	17	バイバイ	16.5	イタタタ	14:17
8	アイタ (いたい)	17	ないない	16.5	ジャージャー	15:04
9	ネンネ	17	おっばい	16.8	ワンワン	15:17
10	ニャンニャン (猫)	17	ねんね	16.9	パパ	16:09
11	バーバ パパ (祖母)	17	よいしょ	17	パンマン	16:16
12	クック (靴)	18	ニャンニャン	17.5	バーチャン	17:16
13	ないない (片づけ)	18	くっく	17.8	ジー	17:21
14	ママ	18	たっち	17.8	プリ (ン)	18:01
15	パン	19	おかあさん	18.1	ギューニュー	18:02
16	あった (見つけた時に)	19	アンパンマン	18.3	ジージー	18:08
17	だっこ	19	おとうさん	18.4	ボーン	18:08
18	お茶	19	どうぞ	18.5	ジャー	18:08
19	牛乳	19	パン	18.7	キティ	18:12
20	手	19	いや	18.7	ブーン	18:12

出典：岩立志津夫、小椋たみ子編『よくわかる言語発達改訂新版』ミネルヴァ書房 2017 p.41

3.3 語彙の獲得

(1) 語彙爆発と即時マッピング

子どもが語彙を増やしていくスピードは、はじめはゆっくりだが、急激に早くなり、1歳半には、「語彙の爆発的増加」の時期に入る。

語彙爆発期は15か月から20か月とされ、爆発期間は約1年とされる。語彙爆発開始時には語数は約60語であることがわかっている。子どもは1日平均9語を獲得するほど、増やしていく速度は速い⁽¹⁷⁾と言われている。たった一度、語が使われるのを見ただけで即座にその語を正しい概念と対応付け(マッピング)が可能になる。このような即時マッピングが、やがて膨大な語彙を使いこなせていく重要な基盤⁽¹⁸⁾となっている。

ヴァリアンは、「子どもは無意識のうちに文法構造を使ってみて、自分が言った言葉を

大人が返した言葉と比較し、非文法的な構造化を確かめているのではないかと述べている^{(19) (20)}。

(2) 2語文から3語文へ

2歳頃には、助詞の抜けた2語文を話すようになる。そして、3歳頃には、つたないながらも日常会話ができる。2語文は次第に助詞のある2語文へと発達し、3歳頃には3語文や多語文へと複雑になっていく。

2歳頃には「これなに」と指差して大人に問い、応答してもらいながら、500～600語の語彙が理解できるようになる。

また、自分のイメージした見立やつもりを言葉で表現できるようになり、言葉の象徴が働き始める。同時に自我が出て、自己主張が始まり、癩癩や反抗の言葉が目立つ時期である。さらに、2歳代は、発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意志や要求を言葉で表出できるようになる。

3歳頃には、約1000語の語彙を身につけ、助詞の使用も正確になる。接続詞を使った従属文も話せるようになる。しかし、3歳児の言葉は、その時の状況や文脈に依存しており、相手の気持ちに無関心で自己中心的発話が多く、けんかや衝突が多い⁽²¹⁾。

3.4 情報端末機器などによる影響

(1) 情報端末通信機器についての保護者の意識調査

2017年に、日本におけるテレビの普及率は96.6%と、各家庭にテレビがあることが当たり前となっている。パソコン78.4%、携帯電話93.0%、スマートフォン75.2%等、動画を視聴できる機器の所有率が75%を超えて⁽²²⁾いる。

総務省「未就学児童等のタブレット、スマートフォン等の情報端末通信機器についての保護者の意識調査」では、0歳児の10.5%が情報通信端末を利用しており、その割合は4歳児、5歳児、6歳児で40%を超えて⁽²³⁾いた。(表2) スマートフォンだけでなく、様々な情報端末機器も使われていて、「タブレット型端末」を使用する0～3歳児は37.7%、4～6歳児は42.5%が利用していた。(表3)

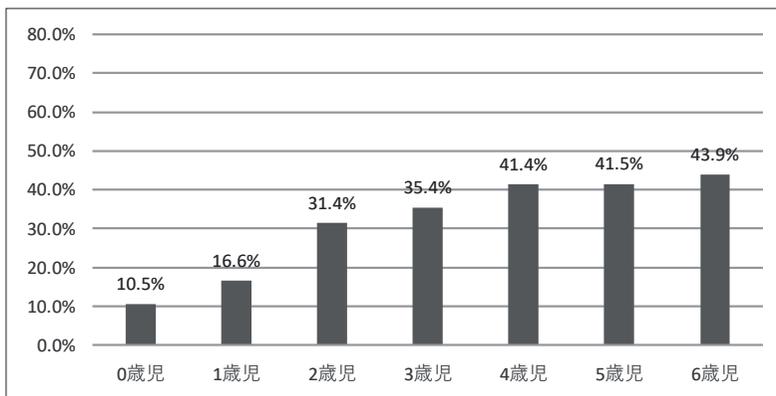
情報端末機器を用いて、利用されている機能、アプリは「動画閲覧 (YouTube等)」は0～3歳児で70.1%であり、4～6歳児は65.0%であった。「知育アプリ」の利用割合も高く、0～3歳児は39.6%であり、4～6歳児は36.7%利用していた。(表4) 未就学児に情報通信端末機器に触れさせる理由として、「保護者が家事等で手が離せない時」は0～3歳児で50.8%、4～6歳児で47.3%、「お子様の機嫌が良くなるから (泣き止む、笑顔になる)」は0～3歳児で56.4%、4～6歳児で28.0%、「学習できるから」は0～3歳児25.1%、4～6歳児で30.5%であった。(表5)

情報通信端末機器に触れさせることの効果として、「保護者の手を煩わせない時間ができた」0～3歳児で56.4%、4～6歳児で52.5%であった。「お子様の機嫌が良くなった」0～3歳児で55.6%、4～6歳児で28.5%であった。(表6)

情報通信端末機器の利用にあたっての約束事として、「利用時間に関して」0～3歳児は30.0%、4～6歳児は49.5%が何らかの約束ごとを決めていた。また、特に約束事を決めていない保護者は0～3歳児は43.9%、4～6歳児は19.0%であった。(表7)

情報通信端末機器の利用にあたって保護者の悩み、不安として、「不適切な情報、画像にふれないか不安である」が0～3歳児で52.5%、4～6歳児で56.3%であった。「心身への影響が不安である」では0～3歳児で61.1%、4～6歳児で53.3%であった。「保護者の知らないうちに課金サイトに接続しないか不安である」が0～3歳児で51.2%、4～6歳児で51.2%であった。(表8)

表2 乳幼児のスマートフォン利用率

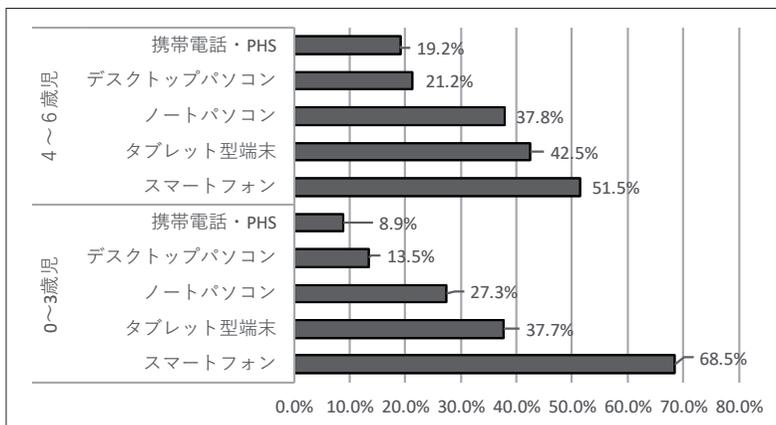


0歳児1599人、1歳児2153人、2歳児1805人、3歳児1701人、4歳児978人、5歳児1247人、6歳児836人

■お子様のスマートフォン利用率 (保護者が見せたり使わせたりするもの含む)

出典：総務省情報通信政策研究所「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告」(概要版) 2017 p.6

表3 未就学児の情報端末機器利用率



■お子様が利用している情報通信端末全て (保護者が見せたり使わせたりしているものも含む)

出典：総務省情報通信政策研究所「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告」(概要版) 2017 p.6

表4 情報通信端末の利用状況

	0～3歳児 (N=750)	4～6歳児 (N=600)
写真加工	60.2	48.7
動画閲覧 (YouTube等)	70.1	65.0
写真・動画撮影	38.9	37.5
知育 (ことば/英語・語学/数遊び/音楽)	39.6	36.7
絵本・児童書	12.8	12.8
しつけ	4.5	3.3
その他遊び (ごっこ遊び、おしゃれ遊び等)	8.4	10.8
音楽	17.6	15.2
パズル	16.8	24.8
お絵描き	18.1	21.5
アニメ	12.7	16.2
ゲーム	18.8	43.2
コミュニケーション (メールやチャット機能)	3.7	5.7
インターネット検索機能 (Google、Yahoo等)	7.6	8.7
その他	0.3	0.8

未就学児を中心とする子どものICT活用①情報通信端末の利用状況

出典：総務省情報通信政策研究所「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告」(概要版) 2017 p.7

表5 情報端末機器の利用目的

	0～3歳児 (N=750)	4～6歳児 (N=600)
保護者の手を離れる (保護者の手を煩わせない) 時間ができるから (静かになる、ひとりで遊ぶ)	50.8	47.3
お子様の機嫌がよくなるから (泣き止む、笑顔になる)	56.4	28.0
学習ができるから (文字、数字、英語、しつけ等)	25.1	30.5
アプリで扱っている対象 (文字、数字、英語、歌等) へ興味/関心が高まるから	15.7	20.8
利用をきっかけに保護者・兄弟姉妹で会話が増えるから (感想を話す、内容を説明する)	4.5	8.7
スマートフォン、タブレット端末等の操作を覚えるから	10.5	19.3
スマートフォン、タブレット端末等に触りたがるから	14	13.7
お友達が情報通信端末を持っているから	1.9	2.2
小学校に入る前に情報端末の操作について学ばせたいから	4.4	8.2
情報通信端末を使わせていると論理的な思考が身に付きそうだから	2.8	3.2
その他	0.4	1.5
特に理由はない	9.1	11.5

お子様を情報通信端末 (スマートフォンやタブレット端末等) に触れさせる理由としてあてはまるものをお答えください。(複数選択)

出典：総務省情報通信政策研究所「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告」(概要版) 2017 p.10

表6 情報通信端末に触れさせた効果

	0～3歳児 (N=750)	4～6歳児 (N=600)
保護者の手を煩わせない時間ができた（静かになる、ひとりで遊ぶ）	56.4	52.5
お子様の機嫌が良くなった（泣き止む、笑顔になる）	55.6	28.5
学習ができた（文字、数字、英語、歌、しつけ等）	23.2	25.8
アプリで取り扱っている対象（文字、数字、英語、歌等）へ興味／関心が高まった	17.2	21.3
お子様自身で知りたい情報を探したり、検索することができるようになった	6.9	12.3
お子様がもっといろいろなことを知りたがるようになった（深く知りたがるようになった）	7.9	14.8
情報通信端末を使った経験について周囲に説明するようになった	4.1	8.8
情報通信端末の利用をきっかけに保護者・兄弟姉妹で会話が増えた	2.3	3.8
スマートフォン・タブレット端末などの操作ができるようになった	18.8	26.2
スマートフォン・タブレット端末等の情報端末機器に関心を持つようになった	7.7	8.8
その他	0.3	0
特に効果は感じていない	9.1	13.2
わからない	2.9	2.7

2) 保護者の意識②評価

■お子様が情報通信端末（スマートフォンやタブレット端末等）やアプリに触れることの効果として実感しているものはありますか。あてはまるものをお答えください〔複数選択〕

出典：総務省情報通信政策研究所「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告」（概要版）2017 p.10

表7 情報通信端末利用の約束事

	0～3歳児 (N=750)	4～6歳児 (N=600)
利用時間に関するお約束ごと（1日15分などの時間制限）	30.0	49.5
利用時間帯に関するお約束ごと（就寝前に利用しない等）	14.8	20.7
利用場所に関するお約束事（子ども部屋では利用しない等）	6.9	9.8
利用内容に関するお約束事（保護者が了承した用途でしか使わない等）	22.4	38.0
利用方法に関するお約束ごと（暗いところでは画面を見ない等）	15.5	23.5
利用する人に関するお約束ごと（必ず保護者と利用する・兄弟姉妹で利用する等）	14.0	18.7
利用後のお約束事（使った後は片づける、使った後は保護者と感想を話す、アプリを使うだけでなく・実物を見に行くようにする等）	3.9	7.8
その他	0.3	0.7
特にお約束事は決めていない	43.9	19.0
わからない	2.3	2.3

1) 未就学児を中心とする子どものICT利用状況②家庭における取組

■情報通信端末（スマートフォンやタブレット端末等）を使わせるに当たって、お子様とお約束事を取りまとめていますか。あてはまるものをお答えください。〔複数回答〕

出典：総務省情報通信政策研究所「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告」（概要版）2017 p.8

表8 情報通信端末を使わせていることへの不安

	0～3歳児 (N=750)	4～6歳児 (N=600)
不適切な情報、画像に触れないか不安である	52.5	56.3
保護者の知らないうちに課金サイトに接続しないか不安である	51.2	51.2
心身への影響が不安である（目が悪くなる、姿勢が悪くなる、勉強などへのやる気が起きない、集中力が低下する）	61.1	53.3
情緒発達の面での影響が不安である	28.5	23.5
脳への影響が不安である	37.6	27.2
ネット依存にならないか不安である	48.5	46.3
いじめに巻き込まれないか不安である	13.2	14.5
お子様に情報通信端末を使いこなすための十分な能力が身につけていない	8.3	7.2
お子様が情報通信端末の使い方に習熟し、保護者のコントロールがきかない	9.7	8.2
他の保護者はどのように使わせているのかが気になる	13.9	8.0
お子様に情報通信端末を与えておもりをさせることに罪悪感がある	18.1	10.8
その他	0.4	0.2
不安や悩みはない	9.7	8.5

2) 保護者の意識③悩み・不安

■お子様に情報通信端末（スマートフォンやタブレット端末等）やアプリを使わせることに対する悩みや不安な点ではまるものをお答えください。〔複数回答〕

出典：総務省情報通信政策研究所「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告」（概要版）2017 p.13

(2) 医学的・科学的観点における情報通信端末機器媒体の子どもへの影響

医学的・科学的観点においては、過度なテレビ視聴に関して危惧を示す研究者や団体も存在している。平面的なテレビやDVD視聴を続け、実体験の少ない乳幼児は、空間認知能力が身に付きにくく、けがをしやすいたことが報告されている⁽²⁴⁾。

1歳6か月程度の幼児を対象としたテレビ視聴が発達に与える影響を検討するための調査では、長時間のテレビ視聴は発語の遅れの頻度が有意に高くなることが確認されている⁽²⁵⁾。3歳児を対象とした調査では、テレビ視聴時間が長い幼児ほど、発語の開始時期が有意に遅い結果であった。また、言語や社会性が有意に低いことを確認した⁽²⁶⁾。

西浦によると親が乳幼児の視聴する番組を制限する頻度が低いと、発語発達が遅れるということ⁽²⁷⁾がわかっている。

さらに、乳幼児期にテレビを見せるばかりで、乳幼児への働きかけを十分にしないと、心の発達に支障をきたすと警告をなす医師もいる⁽²⁸⁾。

(3) 情報通信端末機器媒体と絵本について

栗谷の研究では、1日にテレビ視聴を2時間以上する幼児は、2時間未満の幼児よりも、毎晩、絵本の読み語りをしてもらっている割合が0.1%水準で少ないことが報告されていた⁽²⁹⁾。

坂田らが行ったタブレット端末を利用したデジタル絵本の研究では、3歳児のエピソード記憶の成績は機械音声よりも、実験者が読み聞かせる肉声の方が良い結果であった⁽³⁰⁾。

(4) テレビ視聴と幼児の生活リズムへの影響

テレビ視聴と子どもの生活リズムの研究では服部氏らによって、テレビ視聴の長い幼児は就寝時刻が遅く、睡眠時間が短いことが報告された⁽³¹⁾。

また、曾根氏によって、食事中にいつもテレビをみる幼児の群は、午後10時以降に就寝する遅寝の幼児が他の群に比べて5%水準で多いことが確認された⁽³²⁾。

同様に、五味らの研究では、朝のテレビ視聴習慣のない幼児は、朝のテレビ視聴習慣のある幼児に比べて、1日の平均テレビ・ビデオ視聴時間が短く、平均就寝時刻が早いことを確認した⁽³³⁾。

4. 考察

乳幼児は、愛着や共感をもつ相手やモノが強化因子になりやすく、自分の感覚、快感や不快感を基軸として、言葉の獲得をする。また、模倣行動を促す動きをする脳内のミラーニューロン細胞により、共感発話へとつながる。このことから、乳幼児に好かれ信頼関係を構築するほど、養育者は乳幼児の模倣の対象になりやすく、子どもの言葉の発達へ与える影響も大きくなるといえよう。

養育者、保育者と乳幼児との密なコミュニケーションが後に豊かな言語活動となる。そのようなことを念頭におき、保育者は、乳児自身に対しておおいに愛情の気持ちを込めて話しかけ、スキンシップとともに、乳幼児と信頼関係を築くことが重要であるといえよう。

1歳から1歳半頃の幼児は、語彙爆発期に即時マッピングができる。このことから、0歳の喃語期から養育者における応答的環境や乳児の直接体験を含めた行動が非常に重要であると言える。さらに、乳幼児は楽しい嬉しいなど自分の感覚に照らしあわせて、好きなことを共にする体験や、様々な感覚的な言語、非言語的コミュニケーションが非常に重要な時期である。前言語の時期より、乳児の関心や経験を承認、代弁して、「～したいのね」と言語化して返すことによって、指差し行動を促進する環境づくりが必要不可欠なことであるといえよう。

「探索期」に探索の頻度の高い子どもは言語の理解力があるとされている。このことから、歩行をして、自由に探索活動を始め、伝達の指差し行動が見られた時にこそ、養育者や保育者が応答することが、子どもの知識や言葉の発達の促進のために大切なことである。

1歳半ごろの幼児が「これ何」と同じ事物を何度も指さして、養育者に聞く時期がある。養育者や保育者は「さっき言ったでしょう」「もう聞くのおしまい」と答えない場面がみられる。養育者や保育者は子どもの指差し「これなに」の問いや子どもが発する言葉や動作、機微を見逃さず、同じことを何度も聞かれても、根気強く応答することが大切なことである。

一方、乳幼児の時期から保護者の相談相手がいることや、親の自信や家族関係や対人関係の良い家庭は、言語能力と対人技術コミュニケーションの発達が良いという報告があった。保育者は、これらのことを念頭に置き、乳幼児が安心できる家庭環境を基盤として、乳幼児と家族がいっしょに過ごす時間を多くもつこと。例えば、買い物や食事をもつ時間を

確保の奨励も必要不可欠であるといえよう。養育者が安定して子育てができるように、養育者の話に真摯に耳を傾け、保護者支援を継続的に実施していくことも保育者の重要な役割であろう。

3歳未満児のスマートフォンの利用率は約3割であり、そのうち、約7割が動画視聴のために利用していた。情報端末機器に触れさせる理由として、保護者側の事情と考えられる利用が3歳未満児で5割を超えていた。このことから、便利な情報端末機器で子守をしていることが推察できた。また、子どもが様々な情報端末機器を使うことで、子どもの発達に不安をもっている保護者も5割以上存在した。生活リズムの弊害に関しては、遅寝短時間の子どもは、脳機能がうまく働かず、対人コミュニケーションがうまくいかないことがわかっている⁽³⁴⁾。

乳幼児から、生活リズムを崩してまで情報端末機器を使い動画をみたり、ゲームを講じたりすることは言葉の発達に悪影響で、子どもの健康維持にも弊害が及ぶであろう。保育者はメディアに長時間ふれさせることの弊害、最新の知見情報を収集し、保護者に伝えることも大切な役目であろう。

絵本に関しては、人間の実際の声で絵本を読み聞かせる効果を知らせ、奨励をしていきたい。一方、情報端末機器に触れさせる時に、約束事をしていない保護者が約4割存在した。メディア視聴の約束事や保護者のもとで利用すること等の家庭内でのルールづくりが重要であり、そのことを保育者は根気強く伝える必要がある。

情報端末機器での学習アプリをうまく活用している家庭が4～6歳児で約20%存在した。「深く知りたがるようになった」と答えている幼児の割合は年齢が上がるにつれて上昇していた。情報端末機器で得た情報をきっかけに、子どもの様々な関心や知識を深め、親子の触れ合いの時間や会話を多くもちながら、直接体験につなげていく工夫も必要であろう。

5. おわりに

情報通信端末機器を上手に活用しながら、意図的な直接体験や人と人との触れ合いを通じて言葉の獲得、コミュニケーション能力向上のための保育・教育が求められているといえよう。

2018年施行の保育所保育指針では、乳児保育に関わるねらい及び内容基本的事項イに、身近な人と気持ちが通じ合うには、「受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う」さらに、1歳以上、3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容（1）基本的事項に、「愛情豊かに、応答的に関わることが必要である」と新たに付記されて⁽³⁵⁾いる。

幼稚園教育要領では第1章総則第2（9）に言葉による伝えあい「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手に話を注意して聞いたりし、言葉による伝えあいを楽しむようになる」⁽³⁶⁾と新たに付記された。

乳児期から、信頼のある養育者や保育者から乳児の要望や気持ちを汲み取り、子どもの気持ちに共感し、代弁して、たくさん応答的な言葉がけをすること。その繰り返しが、人への信頼感につながり、乳幼児は言葉を獲得していく。また、幼児期には、先生や友達と心を通わせる、幼児の周りの人間との心の交流をもとに、豊かな体験をすることが言葉の育みにつながる。

それらのことを保育者はたゆまなく実践し、保護者に日ごろから手本として示すことも必要不可欠であろう。さらに、それらのことを保護者に奨励し、家庭においても具現化できるように、根気強い子育て支援・家庭教育が必須であろう。幼稚園教育要領・保育所保育指針の改正をもとに、乳児期から断続的に、応答的な言葉の指導方法の充実を期待したい。

引用文献

- (1) 平成28年度文部科学省委託「ICTを活用した教育推進自治体応援事業（教育メディア等の普及に向けた教育委員会と首長部局の連携に関する調査研究）報告書」一般社団法人日本視聴覚教育協会（2017年）
- (2) 文部科学省「指導要領を見据えた小中高等学校教員のICT活用指導力向上のためのICT活用指導力向上研修実施モデル 解説書」（2019年）p.1
- (3) 文部科学省総合教育局男女共同参画共生社会学習安全課「第2次学校安全の推進に関する計画」（2017年）p.20
- (4) 文部科学省「子どものICT活用能力に係る保護者の意識に関する調査」（2015年）p.1
- (5) American Academy of pediatrics POLICYSTATEMENT : Media Use by Children Younger Than 2 Years, PEDIATRICS (128), (2011年)
- (6) 谷村雅子、高橋香代、片岡直樹、富田和巳、田辺 功、安田 正、杉原茂孝、清野佳紀「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」『日本小児科学会雑誌』108巻4号（2016年）pp.14-37
- (7) 榎沢良彦、入江礼子『保育内容言葉』（建帛社、2008年）p.18-22
- (8) 正高信男『身振りの行動発達学』科学63巻（1993年）pp.499-507
- (9) 嶋田総太郎『自己と他者を区別する脳のメカニズム ソーシャルフレンズ 自己と他者を認知る脳』（東京大学出版会、2009年）pp.59-78
- (10) Watoson,J.S. smiling cooing and 'the game' Merrill.Palmer Quarterly 18（1973年）pp.323-339
- (11) 今井むつみ、針井悦子『言葉をおぼえるしくみ一母語から外国語まで一』（ちくま学芸文庫、2014年）p.44
- (12) スーザン・H・フォスター＝コーエン、今井邦彦訳『子供は言語をどのように獲得するのか』（岩波書店、2001年）pp.33-35
- (13) 中野由美子、神戸洋子『新・保育内容シリーズ4 谷田貝公昭〔監修〕言葉』（一藝社、2010年）p.15
- (14) 嘉和朝子、當山りえ、石橋由美「探索活動と乳幼児保育」『琉球大学教育学部紀要第一部・第二部』54巻（1999年）p.505
- (15) ウェルナー／Bカプラン、柿崎祐一（監訳）鯨岡 峻、浜田寿美男（訳）『シンボルの形成一言葉と表現への有機一発達論的アプローチ』（ミネルヴァ書房、2015年）
- (16) 小林春美、佐々木正人『子どもたちの言語獲得』（大修館書店、2008年）pp.83-205
- (17) 乾 敏郎、天野成昭、近藤公久「縦断的観察による語彙と文の獲得の定量的分析」『認知科学』

- 10巻2号(2003年) pp.304-317
- (18) 針生悦子「子どもの効率よい語彙獲得を可能にしているもの—即時マッピングを可能にしているメタ知識とその構築にかかわる要因について」『心理学評論』49巻1号(2006年) pp.79-90
 - (19) Valian, V “Logical and psychological constraints on the acquisition of syntax.” In L. Frazier & J. de Villiers (eds.) Language processing and language acquisition (Dordrecht: Kluwer1990) pp.119-145
 - (20) 小林 前掲書p.30
 - (21) 中野 前掲書pp.77-78
 - (22) 内閣府経済社会総合研究所景気統括部「消費動向調査平成30年3月実施調査」(2019年)
 - (23) 総務省情報通信政策研究所「未就学児童等のタブレット、スマートフォン等の情報端末通信機器についての保護者の意識調査」概要版(2015年) pp.1-13
 - (24) 前橋 明「子どものからだの異変とその対策」『体育学研究』49巻3号(2004年) pp.17-208
 - (25) 加納亜紀、高橋香代、片岡直樹「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴が幼児の言語発達に及ぼす影響」『日本小児科学会雑誌』108巻11号(2004年) pp.1391-1397
 - (26) 加納亜紀、高橋香代、片岡直樹ら「3歳児におけるテレビ・ビデオ視聴時間と発達の関連」『日本小児科学会雑誌』111巻3号(2007年) pp.454-461
 - (27) 西浦和樹「子どもの言語発達に及ぼすテレビ視聴の影響」、『日心大会論文集』70巻1号(2006年) p.158
 - (28) 片岡直樹「こどもの脳の発達へのテレビ・ビデオの影響：テレビによる後天的な言葉の遅れの事例の中心に」『日本未熟児新生児学会雑誌』20巻2号(2008年) pp.211-216
 - (29) 栗谷とし子、吉田由美「幼児のテレビ・ビデオ視聴時間、ゲーム時間と生活実態との関連」『小児保健研究』67巻1号(2008年) pp.72-80
 - (30) 坂田陽子、川口沙也加、杉浦悠子「幼児の年齢に応じたデジタルデバイスの使用方法の検討—デジタル絵本をもとに—」『デジタル教科書研究』2巻(2015年) pp.19-31
 - (31) 服部伸一、足立 正、嶋崎博嗣、三宅孝昭「テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響」『小児保健研究』63巻5号(2004年) pp.516-523
 - (32) 曾根眞理枝「食事中にテレビを視聴する幼児の食生活」『横浜女子短期大学研究紀要』23巻(2008年) pp.1-3
 - (33) 五味葉子、泉 秀生、前橋 明「朝のテレビ視聴の有無別にみた保育園幼児の生活習慣の実態とその課題」『子どもの健康福祉研究』25巻(2016年) pp.16-21
 - (34) 前橋 明、中永征太郎、渋谷由美子、石井浩子「幼児のからだの異変とその対策」『幼小児健康研究』12巻2号(2005年) pp.50-62
 - (35) 厚生労働省『保育所保育指針解説』(フレーベル館、2018年) pp.372-374
 - (36) 文部科学省『幼稚園教育要領』(フレーベル館、2018年) p.7

Summary

Language development in infants and children,
and support for caregivers and parents in fostering language

Miho Yamanashi

Information from around the world can be efficiently obtained with use of the Internet, the spread of smartphones, and other developments, and this has put children in a passive position with respect to information. The education of services on an online that allow children to view video classes and the use of learning tablets at large telecommunications companies have made it possible to watch videos anytime and anywhere on their online services, and they are also being used in field of education. A non-insignificant number of parents even prioritize their smartphones and tablet computers over direct communication with their young children, having them watch videos to keep them occupied. There is concern about detriments to language development in infants from rarely being spoken to and a lack of communication with humans if these convenient information tools are used continuously on a daily basis.

As caregivers, we sought and confirmed ways to develop language and communication skills and cultivate language from early childhood based on previous research on language development in infants and children under the age of three. In doing so, we investigated support and coping methods for parents and caregivers to foster language so that young children will acquire language amid the various problems of today.

Keywords Language development, infants, parents, nurturing, childcare support

(2019年11月7日受領)